放送抄録　2008年10月13日放送・10月20日再放送

## 社会起業家の挑戦①

# カンボジアに自立のチャンスを

多摩大学大学院教授　田坂広志（たさか・ひろし）
司会　町永俊雄（まちなが・としお）

**ビジネスを通してカンボジアの人材育成に取り組む社会起業家を二回に分けて取り上げます。今回は、クッキー工房を経営する小島幸子（こじまさちこ）さんです。**

小島幸子さん

クッキー工房で作業するカンボジア人の従業員

クッキーショップの現場リーダーを務めるサン・ソニーさん（右）

### カンボジアの若者にビジネスを

町永　これまで福祉サービスというと多くは行政が担ってきましたが、社会起業家の活動は、もちろん事業で利益をあげるのですが、その利益を自分のためだけではなくて、福祉サービスにつなげていこうということで、新たな福祉の力として大変注目されています。

＊　＊　＊

世界遺産アンコール・ワット遺跡のあるカンボジア・シェムリアップ州。二〇〇八年八月、この州のデパートにアイスクリームとドーナツを売る店がオープンしました。

材料のフルーツはカンボジア産、アイスクリームのコーンにも自国産の米の粉が使われています。地元の食材を地元の人に味わってほしいというコンセプトです。

この店のオーナー小島幸子さん（三六歳）は、カンボジアの若者を雇い人材を育てようとこの店を立ち上げました。

「お客さんが帰ったら掃除をして」

「もっと大きな声ではっきりと。カウンターの外まで聞こえないわよ。お客さんの注文を繰り返して」

スタッフの接客や掃除のしかたなどを基本からこまかく指導します。今後は経理や在庫管理の方法なども教えていくことにしています。

### 「カンボジアには人間にレベルがある」という若者の一言

小島さんは一〇年前、日本語教師を目指してカンボジアに渡りました。あるとき教え子の若者から聞いた言葉が社会起業家を志すきっかけとなりました。

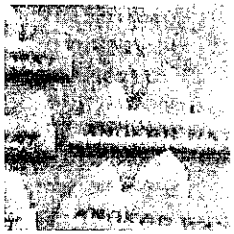
「カンボジアには人間にレベルがある。農村に生まれたら努力しても一生チャンスはつかめない」

カンボジアは、人口の半分が三〇代以下の世代です。しかし、その大半は十分な教育を受けることができず、定職につけないまま貧困から抜け出せずにいるのです。

「そんなことないよ、頑張れば、と言いたかったけど、その言葉はすごく軽いと思ったんです。頑張ってもどうにもならない現実がある。だから、しっかりと働いて自分でおカネを稼いで、頑張った人はちゃんと評価されて、意欲をもって可能性を広げていける、そういう場をつくりたいと思ったんです」（小島）

小島さんは四年前に、観光客向けのクッキー工房とショップを立ち上げました。カンボジアは長い間の内戦で国は疲弊し、貧困や教育の荒廃の影響で国の発展を支える人材が育っていません。都会には定職につけない若者があふれています。小島さんはこの状況を変えたいと起業したのです。

クッキー工房では、アンコール・ワットをかたどった観光客向けのクッキーを農村出身の女性たちが手際よくつくっていきます。クッキーショップはアンコール・ワットのすぐ近くにあり、毎日多くの観光客が訪れます。客のほとんどは日本人。接客態度、品質、衛生管理、すべてに高い水準が求められます。


アンコール・ワットをかたどったクッキー

小島さんは若者を徹底的に指導しました。会社に入るとまず接客や衛生管理などの基本を学ばせます。この従業員の中から能力が高く向上心があると認められた人を「現場リーダー」に昇進させ、部下の指導などを任せます。昇進に合わせて給料を上げ、やる気を引き出します。さらにワンランク上の「リーダー職」に昇進した人には人事管理や取引先との交渉まで担当させ、将来、会社の経営者になれるノウハウを身につけさせます。

クッキーショップでレジや接客を担当する従業員のスレイ・ナエさんは、三年前から働いています。貧しい農村の出身で、中学校は卒業していますが、電卓を見たことすらなく、最初は簡単な計算もできませんでした。小島さんや先輩の指導、本人の努力で成長し、今では毎日店の売上の計算を任されるまでになりました。

クッキーショップの「現場リーダー」を務めるサン・ソニーさんも貧しい農村の出身です。入社したのは四年前、最初はクッキーを製造する工房で働いていました。よく気が回り、こつこつと努力する姿勢が小島さんに評価され、去年、現場リーダーに抜擢されました。接客に役立てようと、週に三回会社で行われている日本語教室にも積極的に参加、熱心に勉強を続けてきました。商品は足りているか、店内は整理整頓されているか、店全体の動きに目を配りながら従業員に次々と指示を出します。

「今リーダーとして働くことができ、ここでの仕事に満足していますが、将来は、この会社での経験を生かして自分の店を持ちたいと思います」（ソニー）

### 人材が育つ喜び

若者たちが成長し一日も早くカンボジア社会の中で自立してほしいと願ってきた小島さん、スタッフをきびしい口調で指導することも珍しくありません。そうしたやり方に反発しショップの店員が一度に半数以上もやめてしまったことがありました。

「なんで私は日本から遠く離れたところに来て、涙を流しながらこんなことを一人でやっているんだろう、